学習院大学史料館
ミュージアム・レター
Gakushuin University
Museum of History
Museum Letter
No.52
発行日 ● 令和5年(2023)12月20日

学習院大学史料館所蔵 ブライス関係資料について

昭和天皇による「人間宣言」の起草者の一人として知られる日本文学研究者・レジナルド・ホレス・ブライス(1898－1964)は、昭和21(1946)から39(1964)年の間、学習院、学習院大学の英文科教授として学生の指導にあたりました。

ブライスの教え子で元本学英米文学科教授の荒井良雄氏のお声がけがきっかけで、当館では2013年にブライスのご遺族より、ブライスが晩年住んだ大磯の自宅(4頁下写真)に保管されていた資料をご寄贈いただきました。

またその後、関係者からも資料を受贈し、現在ではブライス関係資料として1155点を所蔵しています。禅や俳句にまつわる著書や旧蔵書、自筆原稿、新聞・雑誌の切り抜きのほか、試験答案等の学習院関係史料、家族との書簡や写真、京城帝国大学時代に親しんだチェロの楽譜、衣類、自転車に乗る時に教科書を包んだ風呂敷等の愛用品、肉声が収録された聴覚資料と多岐にわたります。

これらはブライスの業績のみならず、激動の時代において“日本に住み、日本文化を探求した英国人”として歩んだ彼の人生をも伝える貴重な資料です。

学習院大学史料館 学芸員　冨田ゆり

教壇に立つブライス　1950年(昭25)頃

ごあいさつ

学習院大学史料館は、中世以来の公家・地下官人や、近世から近代の大名・華族、大名家家臣等の史料に加えて、学習院大学の関係者についても史資料を収集し、調査研究をおこなっています。その活動の一環として、第二次世界大戦後間もない頃から学習院大学文学部教授を勤めたレジナルド・ホレス・ブライスについて多数の史料を所蔵しています。今回のミュージアム・レターでは、ブライスを直接知る方々による思い出や、日本文学研究者としての功績を紹介する内容となっています。人物に関する史料の研究は、単にその人柄や業績を解き明かすだけでなく、生存当時の文化・歴史の軌跡を紐解くことにつながります。本号を読むと、ブライスが日本文学研究者として進めた俳句や禅の研究が、戦後日本の体制や本学の存続に影響していた可能性にまで思いを巡らせることができます。激動の時代を生きた外国人教授と人々の交流をご堪能ください。

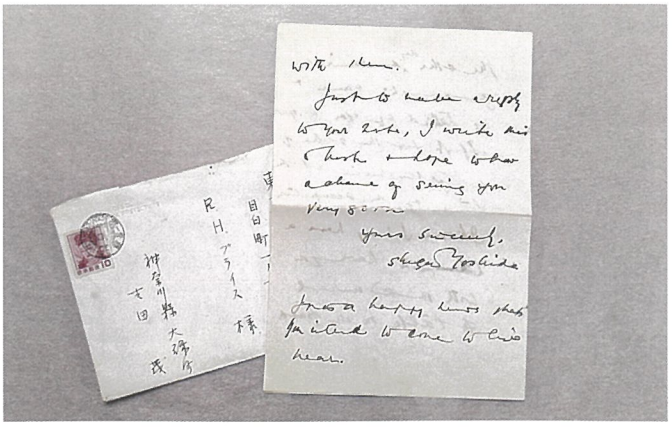
史料館長　狩野直和

ブライス先生

学習院名誉院長・元国連大使　波多野　敬雄

ブライス先生は日本文学を、そして日本を愛し二十六才で来日して六十五才で没する迄殆んど日本を離れなかった。その間第二次大戦で物資も払底する中も帰国することなく、英国人即ち敵国人として抑留生活も経験し、日本の敗戦後には学習院旧制高等科の英語教師になった。ブライスさんは夫人が日本人で日本語も充分こなしたが授業では一切日本語を使わない。敗戦直後のことだから、私のクラスの学生達は外国人と接するのは初めてで、ブライスさんの云うことも理解出来ない者が多かった。しかしブライスさんは面白い教科書を選びユックリ、ユックリ発音し、ジェスチャーも交えて生徒を笑わせたりして退屈させなかった。英語は判らないけれどブライスさんの授業は楽しみだという学生が多かったのは不思議とも云える。そしてブライスさんの話が理解出来るようになりたいというのが、英語を勉強する動機にもなっていたように思う。私は学校制度が旧制から新制に切りかわる時の新制最初の年だったので、ブライスさんには一年間週一回しか習うことが出来なかったのが残念であるが学習院学生時代の良き思い出である。

ブライスさんについて忘れてはならないのは学習院という学校の存続についての貢献である。終戦の時、私のクラスは山形県の鶴岡に疎開していたが終戦の報をラジオで聞いた後、引率の先生が「これで学習院という華族の教育を主目的とする学校の存続は許されないことになるかもしれない」と云ったのを記憶している。事実占領軍(GHQ)の中には学習院の存続に疑問を呈する者もあったという。その際ブライスさんはGHQの幹部と日本文学特に俳句を通じて親交を結び、外務大臣吉田茂の依頼により日本政府とGHQの連絡役も務め、皇室の存続、そして学習院の存続につき力を尽くしたことを付記せねばならない。ブライスさんは、いま鎌倉の東慶寺に眠っている。



吉田茂からブライスに宛てた書簡　1959年(昭34)9月17日付
占領期にブライスが学習院のために尽力したことが書かれている。
のちに吉田の援助によりブライスの著書*HAIKU*(『俳句』)全4巻が出版された

Mister Timeless Blyth（時を超えたブライス（不来子）先生）

筆者：Alan Spence　訳・監修：松永大介

私とR.H.ブライス（1898－1964）との出会いは50年以上前に遡ります。確か1968年だったと記憶します。私はグラスゴー大学の学生で、すでに禅と俳句に関心を持っていました。そんな時、ある友人が、ブライスの重要著作 *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS* を貸してくれました。私は、ワクワクしながらむさぼり読みました。今まで読んだどんな本とも違っており、禅を見る全く新しい見方を教えられました。禅が、風変わりで捉えどころがなく異質なものではなく、近づきやすく万人に通ずるものであることを教えられたのです。ブライスがいう「禅の精神」が英文学の最も優れた部分にみなぎっていることが、シェイクスピアやワーズワスや欽定訳聖書やスティーヴンソン（もちろんスコットランド出身[*1]）やルイス・キャロル（キャロル好みの逆説とシュールなユーモアと共に）をふんだんに引用しつつ示されていました。

その後、自分はブライスの *HAIKU*（『俳句』）全四巻がほしくてたまらなくなりました。これは、春夏秋冬の四季を各巻のテーマにしたものです[*2]。*HAIKU* には、ブライスによる各句の英訳とそれを更に高める魅力的な注釈がついていました。ロンドンに「コンペンディアム」という名の書店があり、四巻全部が揃っていました。当時自分はグラスゴーからヒッチハイクでロンドンまで行き、一巻ずつ購入してはリュックサックに注意深く入れ、あたかも聖典でも取り扱うかのように大事に大事にグラスゴーまで持ち帰ったものです。ブライスによるこれらの書物が自分に扉を開いてくれたと言っても過言ではありません。ブライスの書物は、私の著作活動にも精神生活にも大きな影響を与え、心からの感化を及ぼしました。私は、俳句をつくるようになり、後には短編や長編の小説の執筆や出版をするようになりましたが、それらは皆、日常性にしっかり立脚すると同時に、根幹において精神性を強く有するものになりました（私は、すでにスリ・チンモイ師の指導のもとで瞑想の修行に真剣に取り組み始めておりました）。

自分は、ブライスがどのような人生を送ってきたかの詳細について殆ど知りませんでしたが、1990年代にデイヴィッド・コッブ編の *The Genius of Haiku* と題するブライスの小文集を手にする機会を得て、その序文から彼の数奇な生涯について少しだけですが知ることができました。そして、こんな生涯が本当にあり得るのか、と感嘆しました。

ブライスは1898年に生まれ、第1次大戦中に成人し召集されますが、ジョージ・バーナード・ショーなどの思想家の影響を受けて、すでに平和主義者（かつ菜食主義者）になっていました。戦争参加を拒んだため、良心的兵役拒否者として大戦中、収監されました。一方、第2次大戦中、ブライスは「敵性外国人」として、神戸で収容所生活をおくります。どちらの大戦中においても囚われの生活をおくったのは皮肉なめぐり合わせでした。

鈴木大拙（前列中央）らとブライス（右）
鎌倉円覚寺山内にて　1946年（昭21）

両大戦間の年月についても見てまいりましょう。ロンドン大学在学中に、最初の妻となるアニーと知り合います。卒業後の1924年、当時日本の「保護領」であった朝鮮に移り、英語を教えますが、その間、鈴木大拙（1870－1966）の書物を通じて禅への関心を高めます。アニーとの結婚生活には終止符が打たれ、その後、彼は富子という日本人女性と、再婚します。朝鮮での生活が難しくなり、1940年に日本本土に移り、鈴木大拙と出会い、金沢で教鞭をとります。安倍能成や新木正之介らが保証人となって日本国籍を申請しますが、戦争が勃発し、神戸の収容所に入れられます。自由を失うのは苦痛ではありましたが、持ち前の粘り強さで、収容所生活を最大限に活用します。同じ収容所にいた禅に熱心な米国人ロバート・エイトケンと親しくなり、僧堂での生活にも擬すべき規律のもとに生活します。ブライスが収容中であったにもかかわらず、著書 *ZEN IN ENGLISH LITERATURE*（『禅と英文学』[*3]）が東京の北星堂から出版されたことは、注目に値します（後に、ブライスは、「北星堂は出版の約束を守ってくれたのである」と述べています）。収容所にいる間に、ブライスは、さらに *HAIKU* 全四巻のうちの第一巻を執筆しますが、これが出版されたのは戦争が終わってからでした。

ブライス一家、愛犬ガビと
学習院官舎庭にて　1957年（昭32）1月

ブライスの人生が劇的な展開を見せるのは戦後のことです。ブライスは、心の師・鈴木大拙、そして山梨勝之進（1877－1967）とのつながりを一層強めます。山梨は学習院長として、ブライスに学習院での教職を用意してくれました。ブライスは学習院で英語を教えるだけでなく、皇太子明仁殿下（上皇陛下）の個人教授も務めました。彼は、皇室とマッカーサー元帥率いるGHQとの仲介役になり、双方へ思慮深い助言を提供しました。また、学習院が廃校をまぬかれるよう要路を説得することに成功しました。また、昭和天皇の「人間宣言」の発出にも尽力しました。この宣言が発出されたことで、GHQは、安心を深めました。ブライスの努力が脚光を浴びることは殆どありませんでしたが、きわめて重要な役割を果たしたことで、山梨院長も昭和天皇御自身も彼の業績に謝意を表明したと言われています。

山梨勝之進とブライス
学習院官舎にて　1952年（昭27）頃

ブライスは、学習院で教えるかたわら、精力的な執筆活動を続けます。しだいに彼の文筆は世界的な影響を及ぼしていきます。特にビート世代の作家たちには多大な影響を与えました。アレン・ギンズバーグ、ジャック・ケルアック、ゲーリー・スナイダーらは、ブライスに負うところが大きいことを認めています。J.D.サリンジャーはブライスと書簡を交換したほか、小説の一つでブライスを引用しています。リチャード・ライトは、ブライスの影響で俳句を作るようになりました。

ブライスの生涯に基づいた小説を書くという構想が私の脳裏に浮かんだのは、ほぼ10年前のことです。以前書いた *Night Boat* という小説では、白隠慧鶴禅師の生涯を自伝の形で描きましたが、今回もこの手法を採用しました。*Mister Timeless Blyth*（時を超えたブライス先生）という題名は、「ブライス」という名前に「不来子」という漢字を当てるという鈴木大拙による一種の言葉遊びから発案したものですが、この本の冒頭において、ブライスが、1964年の東京における死の床で一生を振り返る場面を想像してみました。自分は、ブライスの書いたものを沢山読んできたおかげか、彼の声を聞くことが出来たと感じています。冒頭の何章かは、その声に導かれて書いたものです。自分の想像の中に、戦争不参加の信念ゆえに投獄された青年ブライスが現われました。第2次大戦後のブライスの仕事についても、彼の著作とそれがもたらした影響についても、彼の晩年の日々についても、彼の声に耳を傾けながら筆をすすめました。

横田基地内で近代極東史のクラスに招かれた
ブライス　1949年（昭24）2月14日

本を書くための調査はまず、岐阜の吉村侑久代先生と京都のノーマン・ワデル先生というブライスについての豊富な知識と独自の観点を有する二人の学者との接触から始まりました。お二人とも、とても親身になって私を助けてくれました。しかし、ブライスの一生の中で、まだ埋められるべき空白が沢山残っていました。――朝鮮在住時代、2回にわたる結婚、家庭生活などです。自分は、いわば自ら書き始めた文章に追い込まれた形になってしまいました。書きかけの原稿をかたわらに置き、じっと時がくるのを待ちました。

すると、いつもの通り、偶然の出会いが扉を開け、前進を可能にしてくれました。グラスゴー大学の学究である矢崎早枝子さんが、ご自分が準備していたシンポジウムへの出席を打診するため連絡を取ってくれたのです。自分は「残念ながらシンポジウムには出られないのだが…」とお断りしつつ、執筆中の本について話しました。矢崎さんは「東京の学習院にブライスゆかりの品々があるのはご存知ですよね？」と尋ねてきました。自分は「えっ、本当ですか！」と驚きました。

それを受け、早枝子さんは、学習院大学史料館の大川基子さんと冨田ゆりさんを紹介してくださり、直接連絡できるようにしてくれました。幸い東京に行くための資金も確保できました。東京では、学習院大学史料館の方々が、自分を温かくそして優しく迎えてくれ、ブライスに関する所蔵資料を見せてくれました。自分は圧倒されました。それが宝の山だったからです。手書きの原稿や書簡の数々、ノート類、ありとあらゆるチラシの類などがありました。写真や葉書や、走り書き用の手帳もありました。試験用紙の裏に記された随筆の下書きもありました。

かつて1960年代に読んだブライスの初期の書物のオリジナル原稿（手書きやタイプで何度か書き直したもの）もありました。ブライスの着たツイードのスーツ（試着すると袖が短かった）、外套、本人が吹いた何本かのフルート、メモ帳までも拝見出来ました。自分は、ブライスとブライスの心に直かに触れることが出来たと感じました。

この滞在の間に、ブライスの教え子であった宗片邦義先生や、ブライスの女婿に当たる武田雄二さんにお会いすることも出来ました。武田さんは、ブライスの秘書を務めた岩村智恵子さんという、若い時にブライス一家と暮らしていた方を紹介してくれました。日本でお会いした方々は、どなたも例外なく親身になって自分を助けてくれました。

本を書くのに十分な材料を得て、感謝の気持ちに満たされて自分は帰国しました。その上さらに、友人である松永大介さんから一層の支援を得ることが出来ました。松永さんは、元のエディンバラ総領事で、すでにご自身がブライスに関心を持つようになっていました。ブライスの同僚であった新木正之介先生が編纂した彼に関する随筆集（英訳はない）の内容を翻訳して伝えてくれました。（この随筆集も学習院大学史料館が親切に貸してくださったものです。）これらの随筆は、ブライスの人となりの様々な側面を示すものでした。気難しいが陽気だった、厳しいが優しかった、カリスマ性があり何よりもユーモアがあった（禅を理解する上でブライスが重視した点）などと、ブライスが周囲の眼に映っていたことを知ることが出来ました。

2019年（コロナ禍や都市封鎖の直前）でしたが、スコットランドの文筆家兼編集者のロビン・ロバートソン氏に、自分が執筆中の本のこと、これからブライスに関する資料を拝見すべく日本に行く予定であることを話しました。それに対しロバートソン氏は、自分自身の経験を踏まえて、「まずは、資料にどっぷり浸かり、その吸収に努めなさい。次に、それを一切忘れて、ただ書き始めなさい。」というアドバイスをしてくれました。

自分はこのアドバイスを実行し、そしてワクワクして執筆に取りかかりました。ブライスを語るに相応しく意気揚々として！ そして3年余りを経て、本はタトル社から出版されました。今回、東京に戻れたことをとても嬉しく思います。学習院さくらアカデミーと紀伊國屋書店新宿本店（アカデミック・ラウンジ）で出版記念講演会を開催することもできました。自分は、ひとつの円を一巡したとの感を抱いています。ブライスの教え子の何人かにお会いできたのは光栄であり感動的でもありました。これらの方々は現在80代であり、ブライスとのそれぞれの思い出を語ってくれました。

ブライスは、波瀾多き自らの人生を振り返って、内なる宿命ともいうべきものに従ったのである、と書いています。自分も同様に感じます。ブライスの人生について語ることが、私の宿命として組み込まれていたのだと感じます。彼の平和のメッセージが、日本と世界にとって一段と重要になっている今日、彼の人生について語ることが。

＊1 アラン・スペンス先生もスコットランド出身
＊2 *Eastern Culture, Spring, Summer-Autumun, Autumun-Winter* の全四巻で構成されている
＊3 英文学の中にも禅が見出せるというブライスの趣旨を体すれば、『英文学における禅』という邦題が相応しい

著者 Alan Spence（アラン・スペンス）

詩人、小説家、劇作家。アバディーン大学名誉教授。スコットランド・グラスゴー生まれ。グラスゴー大学で英文学と哲学を学び20代から瞑想を実践し、東洋哲学、特に禅に関心を持つ。数々の英語俳句集を発表するとともに、トーマス・ブレーク・グラバーを題材とした *The Pure Land*、白隠禅師を題材とした *Night Boat* などの小説を出版。2017年、エディンバラ市・桂冠詩人。2018年、日英文化交流に対する功績により旭日小授章を受章。
執筆活動のかたわらエディンバラで良書を扱う書店も営む。

訳・監修 松永　大介（まつなが だいすけ）

大阪学院大学教授。1979年東京大学卒業。在学中、米国イリノイ大学に留学。外務省に入省後、在外研修を機会としてスタンフォード大学にて経営学修士（MBA）を取得。歴代総理大臣や外務大臣の英語通訳を務めたのち、宮内庁御用掛として英語通訳。在ベトナム大使館公使、在香港首席領事、在ドバイ総領事、在エディンバラ総領事、在エチオピア特命全権大使を歴任。
学生時代から禅に親しむ。アラン・スペンス氏との親交は、エディンバラ在勤時代から。

ブライスファミリーの思い出

瀬川美恵子

右よりブライス長女春海、ブライス、富永惣一、妻芳子、筆者美恵子、ブライス妻富子、手前ブライス次女ナナ　学習院官舎にて　1956年（昭31）1月

ブライス先生の思い出を、ひと言記させて頂きます。私は富永惣一（学習院大学名誉教授・国立西洋美術館初代館長）の次女でございます。父は初等科から学習院、東京帝国大学卒業後、学習院高等科の教官として、又、大学の教授として過ごさせて頂きました。終戦後、目黒の家の焼失の為、疎開先から目白の千登世橋近くの官舎に住まわせて頂きました。昭和二十二年頃のことと思います。官舎は右に三軒、左に三軒建てられ、我家は古い日本家屋でしたが、お隣りのブライス邸は白壁の洋風のお家。そこには私と同年のご長女春海ちゃんがいらして、すぐに仲良しになりました。春海ちゃんは、目白の自由学園幼稚園に通っておられ、私も一緒に連れていって頂いたことを覚えております。

小学校入学にあたり、ブライス先生から「春海と同じ学校に通わせたい」というお話を頂き、二人揃って東京高等師範學校（現筑波大学）附属小学校に入学、高校まで十二年間、毎日一緒に登校しておりました。学習院大学もご一緒でしたので、「二人で一人前」とも云われておりました。

子供の頃の学習院は広々として、すべてが遊び場でした。春海ちゃんは木登りもお得意でしたし、プールでおじちゃまと泳いだり、ガピという犬と走り廻っておられました。正門から入って右手は広い原っぱで、四葉のクローバーを探して幸せな毎日を過しておりました。そんなある日のこと、おじちゃまも自然が大好きでいらっしゃるので、子供ながら二人でお花をいっぱい摘んで、おじちゃまに喜んで頂こうと花束を差し出しましたところ、いきなり頬をピシャリと叩かれました。「花の命を大切にしなくてはいけない」という教えを戴きました。七〇年以上前のことですが心に深く残っております。

先生は英国の方でいらっしゃいますが、仙厓禅僧を尊敬され、日頃は日本人と変らぬ生活をされていたように思います。クリスマスの時だけは応接間が一変し、壁に黒い布を貼り、紙で「東方の三賢人」のような旅人と星空を飾られていました。そのお部屋でおじちゃまはチェロ、春海ちゃんは第一バイオリン、私は第二バイオリンを緊張して音を出したことを思い出します。モーツァルトの「おもちゃの交響曲」等と記憶しております。おじちゃまは菜食主義でいらっしゃいましたが、ミルクとチョコレートはお好きでした。

戦後の辛い時代を春海ちゃんとブライス家の皆様のお蔭で、心豊かに過ごさせて頂きました。心から感謝申し上げております。

年	年令	R.H.ブライス（1898年（明治31）～1964年（昭和39））略歴
1898年（明治31）		12月3日、英国エセックス州に生まれる。5歳でイルフォードのクリーブランド・ロード・スクール（7年制小学校）に入学。13歳でカウンティ・ハイスクール（5年制中学校）に入学
1916年（大正5）	18歳	第一次世界大戦中、良心的兵役拒否者としてロンドンのワームウッド・スクラブズ監獄に収監され労働に従事する。このとき不殺生の精神が強固となり菜食主義者となる。1919年に釈放後、出身校のクリーブランド・ロード・スクールで6ヶ月間教師を務める
1920年（大正９）	22歳	ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジに入学、英文学を専攻、1923年に優等第一級で卒業
1924年（大正13）	26歳	学友のアンナ・ベルコヴィッチと結婚（'35年離婚）。京城帝国大学予科講師（英語）として着任、2年後に京城帝国大学講師となり英文学、ラテン語を教える
1927年（昭和2）	29歳	鈴木大拙の著書 *Essays in Zen Buddhism* に感銘を受け、禅の教えに強く惹かれる。翌年、のちの学習院長・安倍能成が京城帝国大学法文学部部長に就任
1930年（昭和5）	32歳	京城高等商業学校講師（英語）となる。その後同校に来任した新木正之助（のちに学習院教授）と出会い、終生もっとも親しい友人となる
1936年（昭和11）	38歳	1年間の英国滞在を経て、京城に戻り京城帝国大学予科講師（英語）に復帰。翌年、来島富子と結婚
1938年（昭和13）	40歳	長沙洞妙心寺別院にて、華山大義老師のもとで禅の修行を始める。この頃、日本語俳句「かたつむり」を創作
1940年（昭和15）	42歳	日本へ移住。妻の故郷山口県萩市、その後東京の滞在を経て、旧制第四高等学校の傭入外国人教師となり、金沢市内の官舎に住む
1941年（昭和16）	43歳	日本への帰化願いを政府に提出するもかなわず。10月、金沢で鈴木大拙と面談。12月8日、太平洋戦争が始まり、金沢警察署内に抑留される
1942年（昭和17）	44歳	長女春海誕生。神戸のイースタンロッジ・ホテルの交戦国民間人抑留所に収容される。12月、*ZEN IN ENGLISH LITERATURE*（『禅と英文学』）を北星堂書店より出版。その後 *HAIKU*（『俳句』全4巻／北星堂書店、1949年～52年刊）や *SENRYU*（『英文川柳』北星堂書店、1949年刊）などの執筆に取り組む。終戦までに収容所を2度移動。最後の収容所でロバート・エイトケン（のちにハワイ金剛禅道場師家となる）と出会う
1945年（昭和20）	47歳	神戸の空襲により家財道具、蔵書を失う。敗戦と同時に抑留生活を終え、10月に上京。東京帝国大学の斎藤勇の推薦により学習院傭入外国人教師となり官舎に居住。学習院長山梨勝之進の下で学習院存続運動に尽力。外務大臣吉田茂の委嘱により日本政府と皇室のためにGHQとの連絡係を務める。陸軍中佐ハロルド・ヘンダーソンとともに昭和天皇の人間宣言起草に加わる
1946年（昭和21）	48歳	学習院英文科教授に就任。皇太子（上皇陛下）の英語個人教授を終生務める。外務省研修所講師、東京大学講師、日本大学兼任教授、東京教育大学講師を務める
1947年（昭和22）	49歳	次女ナナ誕生。鈴木大拙とともに *THE CULTURAL EAST* を松ヶ岡文庫より刊行。翌年からは実践女子大学、早稲田大学、自由学園で教鞭を執る
1954年（昭和29）	56歳	*ZEN IN ENGLISH LITERATURE* および *HAIKU* 全4巻で東京大学より文学博士号を授与される。英国へ一時帰国を計画するが、外貨の持出制限のため難航、闇ドル購入等の抜け道もあったが、不正を嫌い渡航を断念
1959年（昭和34）	61歳	5月、勲四等瑞宝章授与。8月、英国女王から外国勲章佩用許可状を受ける
1961年（昭和36）	63歳	山梨勝之進の世話で学習院官舎から大磯の家（下写真）へ移る
1964年（昭和39）		10月28日、脳腫瘍により死去（享年65）。戒名は不来子古道照心居士。学習院旧図書館（北別館）で葬儀、弔辞を安倍能成、新木正之助がよむ。鈴木大拙の意思により鎌倉東慶寺山内「鈴木大拙夫妻乃墓」の近くに埋葬

京城時代の職歴については『京城帝國大學一覧』に拠った

作成：大川基子（学習院大学史料館臨時職員）

大磯の家。家の中央には太い松の木が床から天井まで突き抜けていたという

ミュージアム・レター第52号

令和5年（2023）12月20日発行
〒171-8588　東京都豊島区目白1-5-1
電話　03（5992）1173
FAX　03（5992）9219

Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館
https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua